



大泉小だより

令和8年9月30日発行
練馬区立大泉小学校
校長 小高 敏男



大泉小学校 HP

「生き続ける言葉」

校長 小高 敏男

二学期が始まり一か月が過ぎました。子供たちは元気に学校生活を送り、様々な力を育んでいます。5年生は、移動教室において多くの方々への感謝の気持ちも感じながら、みんなで協力し自分たちの力で成し遂げる素晴らしい力を発揮しました。子供たちは、様々な経験を通して未来につながる力を育んでいきます。これから行われる5組の宿泊学習や10月31日の大泉スポーツフェスティバルもそうです。その行事等を成し遂げる過程において、子供たちの未来につながる確かな力が育まれるよう教職員が一丸となって教育活動を推進してまいります。

さて、子供たちの経験は、どのように未来につながっていくのでしょうか。感動した場面が目に焼き付き、その場面が映像のように思い浮かんで未来につながる場合もあると思います。また、記録した絵や文章に触れた時に、当時の記憶がよみがえり未来につながる場合もあると思います。人によって様々ですが、今回は私の感じている「生き続ける言葉」について紹介します。

今年度の夏休みに、小学校高学年の時に先生や家族からかけられた言葉を思い出しました。その言葉は、長く私の中に生き続けている言葉です。

私は釣りが趣味で、釣行時にはその風景を淡彩画でスケッチし、そこに釣行記録を書き込むようにしています。その記録を次の釣行に役立てたり、釣行に行けない時に次の釣行に思いをはせるよい材料にしたりしています。淡彩画を描くと必ずと言ってよいほど思い出すのは、小学校5年生の時の先生から言われたある言葉です。その頃の私は、鉛筆でスケッチするまでは自分なりに納得がいくのですが、色を塗ると台無しになると感じていました。そのような思いをしたことのある人もいると思いますが、私の小学生時代はまさにそうでした。パレットの上で色を作ると、納得のいく色が作れずにパレットはどんどん汚い色で埋め尽くされていきます。画用紙に色を塗っていくと、どんどんイメージから離れていくのです。そんな悩みを抱えていた私に、『水が大事な絵の具です。』『色は、塗るのではなく線で描くものです。』と言って、先生は空と山を青の絵の具と水だけで描いてくれました。水の量を調節して青色の濃淡だけで描いたのです。それ以来、絵を描く時にこの言葉を思い出すのです。今でも、です。

また、この夏休みには、浴衣を着る機会がありました。私の住む川越では、浴衣を着て町を散策する人の姿をよく見かけます。女性の和服は襟の合わせが洋服と反対なので、逆になっている方も見かけます。誰か教えてあげないといけないと思ったり、一人で着たのなら偉いかなと思ったりします。更に、自分で浴衣を畳めるのかなとも思います。そんな時に私は、子供の頃に『浴衣の右前の襟は、お亡くなりになった人の着方だよ。』と言った母の言葉を思い出すと共に、子供の頃に、浴衣をきちんと畳めずに四苦八苦した際、『裾をもちなさい。』と言われた事が思い出されます。浴衣には、両脇にわき縫いというのがあり、その裾を持ってから肩の方を持つと、ぴーんと長方形になります。母の一言でたちまち綺麗に浴衣を畳むことができたのです。

人には、忘れずに生き続ける言葉があるようです。その時の人の置かれた状況や心情、その人との関係性等によっても違うのかもしれませんが、私たち大人や教師は、子供たちに生き続ける言葉をかけてあげたいものです。教師や親には、「ああしなさい、こうしなさい」と子供に言う場面が多くあります。そんな時に、「綺麗に浴衣を畳みなさい。」と言うのではなく、「裾を持つとできるよ。」と言える教師や親でありたいものだと感じます。

【校区別協議会について～小中連携～】

小学校と中学校が連携することは、子供たちが安心して進学し、学びや生活をつなげていくために大切な取組です。大泉中学校区では、大泉中学校・大泉東小学校・大泉第六小学校・大泉小学校の教員が、互いの学校の授業や子供たちの様子を知り、指導について考えたり、子供たちの成長や支援について情報を共有したりしています。その取組の一つとして、年2回「校区別協議会」を行っています。今後も小・中学校の教員が互いの教育について理解を深め、子供たちが見通しをもって中学校生活へ進めるよう、9年間の学びと成長を意識した小中連携を進めていきます。